歌仙「川尽て」の巻

——其角連句注釈稿 (四)——

石川八朗

「川尽て」の巻

貞享四年刊『続虚栗』所収。同年春の作か。『新山家』所収歌仙や、「丙寅初懐紙」百韻に続き、景気や古典的余情を含む表現がとられ、俳言のない句も多い。露沾、沾徳と一座した、最初期の一巻である。

春興

川尽て鯆流る、さくら哉　　露沾

発句。春（さくら）。詞書の「春興」は、春の興趣。詩語で、漢詩の題としても用いられる。「川尽て」は、川がなくなっての意。川沿いの道を散策して歩いていたが、川がなくなった。そこに鯆が流れるというのであるから、「川尽て」だけでは、川が尽きて、海へ出る川口の意ともなるが、鯆について後述するように、谷川と思われるので、逆に、川をさかのぼって川が尽き、滝になっているところへ出たということであろう。

「〇尽きて」という表現は、漢詩文に見られるものである。『佩文韻府』によれば、「水尽」「潦水尽」「海尽」「山尽」「林尽」「平野尽」などがあり、例えば、「水尽」は李白の絶句「五首」のうちの一首、水の流を上流に向って遠望するというものである。「川尽て」は、それとは意味が異なるが、表現の形は、漢詩的といえるだろう。

「鯆」は、『大和本草』に「所々ノ山谷澮溝ニ生マレテ石間ニ伏ス、小魚一二寸ニ過ギズ、又一種長一二寸、斑文有リ、其形状河豚ニ似テ小、常ハ小谷ニ在ツテ、五月ニ至ツテ水ニ随ツテ流レ落ツ」とあり、続けて、大きなものは、夜になると鳴くが、その声は清亮愛すべきもので、人々は河鹿といっているという説明があるが、『日本山海名産図会』には、鳴くとするのは、蛙の河鹿を誤ったものとし、諸国でカジカとよぶ魚をあげ、図示している。

其角らの鯆の句は、次のようなもので、

カジカ此夕べ愁人は獼の声を釣ル　　其角（虚栗）
峯の松鯆あらしの夕哉　　冬市（続虚栗）
旅人の銭よむ音も夕月夜　　化角（続虚栗）
かじかを生ん石鉢の水
水せきて昼寝の石やなをすらん　　曽良
籮に鮴の声生かす也　　翁（俳諧書留）

川音につれてなき出すかじか哉　団友（其袋）
鰔（カジカ）とはこれが鳴らん生洲町　其角（其袋）
夕月に吸物一ツしかへたり　山蜂
つるべにうけてかじか鳴する　（同）（末若葉）

鰔・鮴・鰔の用字、生洲や石鉢や籮に生かすということから、其角らの「かじか」は、魚であるように思われる。

鰔は、『毛吹草』の連歌四季の詞に見える。これは、『いろは新式』に、

一かしか　水辺也　魚也　秋也
　かしかなく　秋　什

と見えるのなどをうけたものだろうか。什は、里村昌琢のこと。

内藤風虎編『桜川』には、秋季、「鰔」の題で、九句の発句が収められている。

そのこゑみな哥にもれざるかじか哉　小脇道折
石川にりん〳〵となくかじか哉　風虎
かじかとれこゑをしるべに井出の川　水野林元

などであり、

①和歌に詠まれた素材であること。
②石の多い川瀬に住むこと。
③りんりんと鳴くこと。
④井出の川で鳴くこと。

などが読みとられる。蛙の河鹿との混同が見られるようであるが、上記の其角らの蕉門俳書の句も、山川のもの、鳴声が関心の対象になっていること、生かすものであること、秋季であることなど、魚であるようではあるが、『桜川』のカジカの混同したイメージを享けついでいるようでもある。

この発句の場合は、春季であり、「流れる」とあるのが、『大和本草』の記述にも見え、魚と見てよいであろう。

以上、若干明瞭でない点もあるが、鰔は魚で、連歌用語であるので、俗語ではなく、この句には俳言はないことになる。「川尽て」の表現は、和歌にはなく、上述のように漢詩的な感じのものであり、それが俳言的な役割を担っているといえようか。また、秋季で鳴声が本意である鰔の、春、流れ落ちる様をとらえた点も俳諧的で、ちょうど、『蛙合』の、鳴く蛙から飛ぶ蛙への転換のそれと符を合わせたような発想ともいえよう。

この「さくら」は、滝や早瀬の岸に咲いているものであるが、晩春で、散りつつある桜のイメージで見たい。

晩春の頃、山峡の川に添って歩いていると流れが尽きて滝になっているところへ出た。そこで、流れ落ちる鰔を見た。ほとりには、桜が咲き、散り、水中の鰔の黒い影とは対照的に、白い花びらが水面を流れている。

春興にふさわしい桃源郷のような脱俗の世界である。

黄精（アマドコロ）ある峡の日の影　其角

脇句。春（黄精）。黄精は、『書言字考節用集』に「アマドコロ、ワウセイ、サヽユリ」の訓があるが、黄精の訓は、古来、アマナ、ヱミ、ヤマヱミ、オホヱミであり、アマドコロの訓は、『本草綱目啓蒙』に「萎蕤」を訓んでいる。しかし、同書の説明では、黄精と萎蕤は、よく似たものであったと思われる。春、宿根から苗を生じ、大きくなると、茎は30～50㎝ぐらいから1ｍ50㎝ぐらいになり、少し傾いて円く緑色の光沢のある茎で、葉は互生する。陰暦四、五月ごろ細長い鈴蘭形の、垂れた筒形で先が弁となり、白くて弁の部分

が淡緑の花を咲かせる。黄精が「山中陰地ニ生ズ」とあるのに対し、萎蕤は山中の陽地に生じるとあるのが、ちがっている。

アマドコロは、ナルコユリによく似ているが、現代の図鑑等によると、①茎にカドがある。②花のつけ根が濃緑。③トコロに似た地下茎に甘みがある、といった相違点があげられている。漢方では、根茎を用い、強壮剤や打撲傷の塗布薬とする。『大和本草』にも人参の代用とするとある。

この句では、他に季語とすべきものがないので、黄精を季語としなければならないが、当時の式目書、歳時記類には、季語として登録したものを見ない。『図説俳句大歳時記』は夏の部に「甘野老の花」を掲げるが、例句はない。正岡子規編『分類俳句全集』にも見えない。しかし、春の句であることは確かで、黄精の花の時を季として、春季としたものと考える。

さて、「黄精草」が、蘇東坡の「入峡」という詩に見える。「聞道黄精草、叢生緑玉篸」であるが、その前に「入峡初無路、連山忽似龕」の句や、「飛泉飄乱雪、怪石走驚驂、絶澗知深浅、樵童忽両三」などの句もあり、発句の世界とも対応する。

アマドコロが、じみながら可憐な花を咲かせはじめた渓間に日が射し入って、静かなたたずまいを見せている。発句の動きのある情景とは対照的に、閑静な背景の場を付けた。発句の、渓川に添うて散策する人が見出したのがアマドコロであるのは、詞書の「春興」や東坡詩や鯆に対応して、本草的な知識のある風雅の人物の目に映じた情景を意図したものであろう。

春を問童衣冠をしらずして　　沾徳

第三。春（春）。「春を問」は、春まだ浅い中に春らしい風物を求める意とも解されるが、また、春の風物の中で、あれは何、これは何と、ものの名を尋ね問うこととも解される。後者の方が、童にも、黄精やその花の時期にもふさわしい。

なお、先に引用した東坡詩の中に、「樵童」云々の句がある。発句から三句にわたって一篇の詩を対応させるのはおかしいが、この程度は、典拠とするまでもないか。

童は少年であるが、この時期の連句には、よく使われる素材のようである。

童子礫を手折ル唐梅　　其角（虚栗）
酌とる童蘭（ワラハ）切にいで　　野水（冬の日）
田螺わる賤の童のあたたかに　　桐葉（熱田三歌仙）
月朧童に燭をさへぎらせ　　信徳（五百韻三歌仙）
御牧野の笛吹習ふ童（ワラハ）声　　全峰（続虚栗）
稀に童の粮を舂く　　仙菴（一はし）

漢詩的風趣や典雅な情景の中に点じられているが、ことに「賤の童」の句は、付句に「公家に宿かす竹の中みち　芭蕉」があり、田舎の子どもと公家の結びつきを示している。この句は、公家の都落ちと解されている（校本芭蕉全集・連句篇上）。「春を問」の句の場合は、前句から医師が考えられるが、公家に従って医師が来ているという設定であると、離宮、別邸というようなものが考えられる。山麓の公家の別邸に来て、医師が近くの谷々を薬草を見て歩いているのに、村の子が草の名などをあれこれと問うているという付か。

「衣冠」は、公卿の略式の公服。それを知らない童は田舎の子ということであろう。「衣冠」が俳言。

壁なき間屋に残る白雪　　露荷

初表四。春（残る白雪）。「間屋」は、棟の前と後の二方に葺き下ろしにした屋根造りの家。切妻造り。また、「あづまやのまや」と続けて、四阿の略と見られる用法もある。

みやこに住みわびてあふみに
たながみといふ所にまかりて
よめる　源俊頼朝臣

芦火たくまやの栖処は世中を
あくがれ出る門出なりけり　（詞花和歌集）

荒屋の月といへる心を　覚延法師

山風にまやのあしぶきあれにけり
枕にやどる夜半の月影　（千載和歌集）

など詠まれて、住み処としてはわびしい感じがある。

「壁なき」は、荒廃して落ちたと見る。

前句の別邸だが、ここはそれが荒廃してしまっている様か。あるいは田舎の貧家か。「春を問」を、まだ早春の風景の中に、春らしいところを求めているの意として、残雪の荒廃した屋敷跡を出した。

俳言はない。

月冴て砧の槌のつめたしや　嵐雪

初表五。冬（月冴て、つめたし）。月の定座。前句の残雪から、季をもどして冬季とした。「月冴ては冬也」（御傘）。また、砧は秋の季語。月や夜寒と寄合の語である。「碪―月の下、夜寒」（類船集）。

廃屋と月は、前句で記した『千載和歌集』の歌に詠まれているとおりである。

前句の間屋は、夜なべ仕事の仕事場か。井戸を覆う建物とも考えられる。

この句にも俳言はない。

人は風ひくね覚ならまし　虚谷

初表六。雑。「風ひく」は、冬の季語ではないが、前句の冬のあしらい。俳言。

「ね覚」は雅語である。砧と寝覚は寄合であり、「寝覚―打砧」（類船集）。「まし」は推量。

人は、砧の音でわびしく寝覚めるであろうが、月も冷たく冴えた冬の夜なので、目が覚めたら風邪をひいていたという人もいるだろう、の意。

傾城の淋しがる顔あはれ也　角

初裏一。雑。恋。傾城は遊女。「あはれ」は哀憐の情。傾城、淋しがるが俳言。

傾城が淋しがるのは、前句から、風邪の流行で、遊客の足も遠のき、情人も来ないということであろう。

はなやかであるべき遊女の淋しがる顔は、そぞろに哀憐の情を催させる。はなやかな世界に淋しい顔を見出した。

初秋半恋はてぬ身を　沾

初裏二。雑。恋。「初秋半」は、七月十五日ごろで、盂蘭盆のころである。それといわずにそのことをいったものであろう。「恋はてぬ身」は、恋が終わっていない自分、相愛の相手が死に、恋心はなお消えてはいないのに、その人に逢えない、という状況であろうか。「身を」は、身であるのに（どうしたらいいのか）というよう

な意であろう。一句の意は、そうであるが、前句とのかかわりでは、身は傾城であり、傾城が、恋はてぬ身を淋しがる意になろう。恋人が死に、忘れられないままに、盂蘭盆のころになり、恋しい人が精霊となって帰って来るだけに淋しい思いがつのる遊女である。

蛬（キリギリス）歯落て小哥ふるへけり　荷

初裏三。秋（蛬）。蛬は、直翅目キリギリス科の昆虫。『和漢三才図会』に「声最モ亮清、珍ト為ス、之ヲ樊中ニ養フニ、甜瓜、李、錫（シルアメ）砂糖水ヲ以テス」とあり、声を賞翫した。また、和歌では、

ふりまさるあま夜の闇の蛬
たえ〴〵になる声もかなしき　（玉葉和歌集）

蛬おのが鳴く音もたえ〴〵に
かべのひま洩る月ぞ悲しき　（風雅和歌集）

のような、絶えだえの声も詠まれている。

小哥は、短い形式の流行歌。隆達節、投節、継節など。

歯が落ち、小歌がふるえるのは、老の表象。老いてなお、遊興にふけるが、歯も抜け落ち、息も切れて、小歌をうたうにも声がふるえてしまう。小哥が俳言。

前句を、若い頃から遊興に暮し、遊女たちとなじみを重ねながら、なお恋にあきたらないままに老を迎えた人と見て、その老残の姿を付けた。蛬に老人の姿を重ねた。

楼おりかぬる暁の雁　徳

初裏四。秋（雁）。楼は、『訓蒙図彙』に、「たかどの　観閣並同」とあり、二階建ての建物の絵が描かれている。『和漢三才図会』には、「楼ハ二重屋之殿」とあり、書を蔵し絵を描き、登眺遊覧の所と説明されている。俳言。「楼おりかぬる」は、雁が飛びながら、楼に下りて羽を休める気配を見せながら、下りて来ない、の意であろう。

「暁」は、前句を徹宵の宴と見て、時分を定めた。前句の、遊宴が夜中続き、さすがに歌声をふるえるほどにくたびれた夜明け方、その喧騒に恐れて、雁も下りて来ない。

唐の詩人趙嘏の「長安秋望」（千家詩）に、「残星幾点、雁、塞に横たわり、長笛一声、人、楼に倚る」という句があり、この付句に通じる雰囲気を持っている。

鼓うつ田中の月夜悲しくて　谷

初裏五。秋（月夜）。初裏の月。田圃がひろがる村の月夜に、だれが打っているのか、悲しげな鼓の音が聞こえる。能はほとんどが悲劇の物語で、鼓の音には悲愁の響きが添う。村の田圃の中で響く鼓を打っているのは、代官屋敷などの武士の住居か、あるいは楼のある別荘などか。

前句の、雁が下りかねるのを、鼓の音におどろくものとした。「雁―田面」（類船集）。前句の「…かぬる」は、そのようにしたいとは思いながら、それができないという、心の屈折を表現するもので、「悲し」は、それを受けたものだろう。

侘てはすがる僧の振袖　雪

初裏六。雑。釈教。僧は、能で脇の役。僧の振袖は、僧侶の長袖か。「ふり袖も墨の衣は色うすき　全峰」（俳諧勧進牒）。『万金産業袋』に「袖下貳尺より貳寸くらい迄にして貳巾絹は、にては三巾にもする」と記す。「侘」は、思いなやむ。俳言は僧、振袖。

能で、困ってワキ僧に助けを求める場面か。たとえば、「求塚」では、後シテうなゐ乙女の霊が地獄の責苦の中で、「なう御僧此苦をば、何とか助け給ふべき」と訴える場面がある。

また、能の世界の妄執が悲しく、僧の袖にすがって、救いを求める意か。

思ひ得ず楊弓くるゝ園深し　　沾

初裏七。雑。楊弓は、遊戯用の小弓。弓は二尺八寸。矢は九寸。座って七間半先の小さな的に当てる遊び。中世では公家、近世では町人にも普及し、ことに女性の遊びと見られていた。『本朝世事談綺』には「本朝には上古堂上の宮女官女の玩びとし、七夕には第一にすとなり」とある。「園深し」は、宮廷や幕府、大名家の庭などを想定したものであろう。俳言は楊弓。

「思ひ得ず」は、満足し得ないの意か。前句の「侘」と対応する。前句を、劇中の人から、現実の人と見かえ、深窓の庭園で、楊弓に熱中して気晴らしをしようとするが、それもうまくゆかず、日が暮れる。ある時は、高僧に悩みをうちあけてすがる女性を付けた。

三たび浴みて夏を忘ルゝ　　角

初裏八。夏（夏）。暑いので、一日に三回も湯を浴びて涼をとり、夏の暑さを忘れている。温泉地での避暑か。前句を、別荘地での遊びと見た付。前句の「園深し」に、夏を忘れる涼を見出した。俳言はない。

我鞍に蟬のとゞまる道すがら　　徳

初裏九。夏（蟬）。旅。鞍は馬の鞍で、馬に乗っている。道すがらは、旅の途上。蟬がとまるのは、山中か、並木の続く街道の場であろう。馬の歩行もあまり急ぐ体ではなく、ゆったりしたものであることを思わせる。前句の「浴みて」は、水浴であろう。炎天下、ゆっくりした馬上の旅をし、蟬を鞍にとまらせたりして行くが、暑さに堪えがたく、川があれば、水浴をして涼をとる。それが三回にもなった。

砂吹上る垣の松風　　荷

初裏十。雑。「砂吹上る」は、海、湖、河などの岸辺の砂地で、風が強く、砂を吹き上げている状態。垣は、人家があることを示すが、ここは宿か。風の強い、水辺の宿場。

前句の鞍にとまる蟬に、水辺に添うた、松並木と、砂を吹き上げる強風を見たのであろう。

燭とりて花すかしみる須磨の浦　　雪

初裏十一。春（花）。花の定座。須磨の浦は花の名所の歌枕。夕暮れの須磨の海浜で、手燭を持って、花の咲き工合を確かめに出る。さしのべた手燭の明かりに、咲きそろった桜の花がうかびあがる。燭が俳言。

前句を、須磨の海岸と見て、手燭で見る桜を趣向した。風に気を使いながら、手燭をさしのべるのである。

須磨の浦は、いうまでもなく、『源氏物語』等で著名な歌枕で、前句の、どこにもありそうな景が、付句によって、きっちりと特定された。

小の弥生の光みじかき　　谷

初裏十二。春（弥生）。「小の弥生」は、小の月の三月。二十九日しかない三月で、春の最後の月なので、惜しむべき春が一日短いことをいった。「光みじかき」に、その思いがこめられている。「光みじかき」は、前句の燭の光線が遠くまで届かず、燭のまわりだけが明るいことに対応するが、一句としては、時間的な意味と解され、惜春の情の表現となる。燭の火も、桜の花も、はかないものの表象としてはふさわしく、「光みじかき」は、それらを受けたものである。須磨の浦という、古典性の豊かな歌枕を場として、惜春の情を表現しようとした。小が俳言。

濃墨（こま）に蝶もはかなき羽を染て　　角

名表一。春（蝶）。蝶が俳言。墨染に羽を染めた蝶は、『和漢三才図会』に「黒色ニ白点有テ稀ニ飛フ」とある「あけはのてふ」か。墨染めの、はかない羽は、出家の人を暗示する。「蝶も」とあるのは、人はもとよりの意であろう。それは、前句の「光みじかき」の詠嘆に対応する。

前句に無常迅速の感を読みとり、墨染の羽の蝶で応じた。

氷を涌（わか）す蓬生の窓　　沾

名表二。冬（氷）。蓬生は、蓬などが生い茂って荒れはてたところ。歌語。そのような場所の粗末な住居で、水瓶に水を貯えているが、それが氷っているのを割り、沸かして湯にするような暮らしをしている。質素な生活で、墨染の衣を身にまとう人にふさわしい。その窓から、黒い羽の蝶が見えているか。

うれしさよ若衆に紙子きせたれば　　荷

名表三。冬（紙子）。恋。若衆に紙子を着せてうれしがるのは念者で、自分も紙子を着ていて、揃いの姿になっている。若衆・紙子が俳言。

前句の蓬生の宿が、念者の隠棲の家。氷を割って水を求めるような不自由な生活ながら、若衆との暮らしに満足している。

東に来てもまた恋の奥　　徳

名表四。雑。恋。「東」はあずま、江戸。恋の本場の上方から、新しい恋の場を求めて東の江戸へ来たが、恋にはなお深い奥があるように、陸奥にも、ゆかしい恋の風習があるということを聞き、心ひかれるものがある。錦木、十符の菅菰、末の松山、しのぶもじずりなど、恋に因む風習や歌枕があることを踏まえた。

前句の紙子が、仙台の特産である（和漢三才図会）ことから、「奥」のこととしたのであろう。恋のあこがれの心情を表現した。

常陸なる板久（イタコ）にあそぶ友衛　　谷

名表五。冬（友衛）。ただし、打越（二句前）に「紙子」があり、冬の季語なので、差し合いとなる。板久は、潮来。常陸国行方郡。このころ、東北地方と江戸を結ぶ水上交通の要地。遊郭も開設され、遊女屋が八軒あったという。海運業者や鹿島、鹿取への参詣者でにぎわった（角川日本地名大辞典・茨城県）。

板久の一夜、うき名にもあらねば　　峡水（続虚栗）

また、『陸奥衛』には「江戸より行徳まで川船、木下風へ着、爰より夜舟にて板久へ上り」と桃隣の旅程が記されている。板久が俳言。

前句の「恋の奥」の手はじめとして、新興の恋の場として板久をとりあげた。「友衛」は、友人と連れだって遊ぶことを示唆するもの。

前句に、新しい恋の場をたずね求める心を見出して、友人たちと連れて潮来に遊ぶことを付けた。

笑に懼(オチ)て沈む江の鮒　　雪

名表六。雑。人の笑い声におどろいて、江の水面近くの鮒が、深く沈んでしまった。笑いは、潮来に遊ぶ友だちの間のもの。江の鮒は、水郷潮来にふさわしい。静かな水郷に、遊客の歓声が響き、鮒もこわがる。

松並ぶ石の鳥居の陰くらし　　沾

名表七。雑。神祇。神社の参道か。「松並ぶ」は、松並木。石の鳥居のかげ、松の枝が茂っているので、暗く見える。

前句の江は、神社の境内のかたわらを流れている川だろうか。鮒が江に深く沈むのに対応して、「陰くらし」としたか。陰が暗いのは、茂った松の故であり、石の鳥居とともに古く、由緒ある神社であろうか。

凩夜〳〵に寒笛(ン)を吹　　角

名表八。冬（凩、寒笛）。寒笛は、カンテキと読んで、さびしい笛の意か。また、カンブエと読んで、寒稽古の笛の意か。後者か。俳言。

句意は、凩が毎夜、寒稽古の笛を吹く（風の音をたてる）意か。また、「夜〳〵に」で休止して、毎夜、凩が吹く中で、人が寒稽古の笛を吹いている、の意か。寒稽古の笛とすれば、前句の神社の参道で稽古にはげむ姿になる。

前句の暗い感じから、夜とした。

この句も、三句前に、千鳥があって冬であり、これも差し合いとなる。紙子、千鳥、凩と、冬季の句を重ねたのはなぜか、わからない。

葺かけて月見の賤屋荒にけり　　徳

名表九。秋（月見）。月の定座から二句引き上げ。賤屋は、賤が屋、賤が伏屋などと同じく、身分の低い者の住む小さな家。ここは、自分の家のことをいった謙退の語か。

ながく住みふるして、いたんだ屋根を葺きかえようとして、まだ終わらないうちに八月十五夜になったので、屋根を葺きかけたまま、月見をしたが、屋根から月の光がゆたかに洩れ射して、古歌に詠まれた賤屋の世界を現前させている。

衣うつしづがふせやのいとまあらみ
　きぬたのうへに月もりにけり　（玉葉和歌集）

雨はるるしづがふせやのいたまより
　月ぞもりきて袖ぬらしける　（続千載和歌集）

なお、「荒れにけり」の措辞は、和歌の第三句にしばしば用いられるものである。

前句の凩が寒笛を吹くというのを、葺きかけの屋根に起る音とした付か。そのような夜々を経て、十五夜を迎えたということである。前句は、凩で冬季の句であるが、『御傘』には、「木枯は冬なり。秋の句にもあるは秋よりも吹ゆへなり」とあるので、直ちに月の句としたのであろう。

御廟の衛士が袂露けし　荷

名表十。秋（露けし）。哀傷。御廟はみたまや、神社の敬称。御廟が俳言。衛士は、衛士府に属して皇居を護衛する役の兵士であるが、ここは、高貴の人の墳墓を守る役目の者であろう。

最近なくなった主人のことを思い、御廟守りをしている男が、涙にくれる。

前句は、急に立てられた墓守りの住いか。その屋根を洩る月の光に、また悲しみを新たにしている。

角切て裾野に放す鹿の声　雪

名表十一。秋（鹿の角切）。鹿の角切は、秋の彼岸に、奈良の春日神社の神鹿を集めて、角を切り落す行事。裾野は、三笠山や高円山の麓の野であろう。

前句の、亡主への追悼というのをうけて、鹿を野に放すということで、放生の意をきかせた。

鉢に食たく篁（タカムラ）の陰　谷

名表十二。雑。篁は竹やぶ。食はめし。飯をたく鉢は、鉄鉢。竹やぶの陰の草庵で、托鉢の鉄鉢で飯をたく、隠棲の貧しい修行者か

角を切られた鹿が出没するやぶ陰の草庵での生活を付けた。角切の鹿を野に放つのを放生とみなす仏門の人である。鉢・食が俳言。

山おろし笈を並べてふせぐ覧　角

名裏一。雑。山おろしは、山から吹きおろして来る風。笈は、行脚僧、修験者などが、仏具、食物、衣類などを入れて、背負うもので、扉がつき、四本の足がある。「並べて」とあるので、数人以上が群をなしているわけで、山伏などの一行と見られる。

前句を、山伏の旅の途次での、食事の用意の場とした。前句の「篁の陰」に風を避ける気味を読みとり、笈に風をふせぐ場面とした。

聞に驚く毒の水音　沾

名裏二。雑。毒の水といえば、『風雅和歌集』巻十六の、弘法大師の歌に

高野の奥の院へ参る道に玉川と
云ふ河の水上に毒虫の多かりけ
れば此の流を飲むまじき由を示
し置きて後よみ侍りける
忘れても汲みやしつらむ旅人の
高野のおくの玉川のみづ

がある。

はげしい水音の流れがあり、里人に聞けば、毒のある水だということで、旅人が驚いているという意。聞くからに不穏な、その音は、前句の、山おろしの風に対置されたもの。場所を高野とかぎることはない。毒の水のおそろしさを、音で強調した。毒が俳言。

笘買いによする湊は人なくて　荷

名裏三。雑。笘は苫の慣用形。菅、茅などで編み、雨露を防ぐもの。それを湊で買うのは、長距離の航海をする廻船であろう。湊は商業地であり、人々でにぎわうのが常で、人影がないのは異常である。

前句の、毒水のうわさにある、不安、無気味の感を、人のいない

港に寄港した人の不審として示した。

雪の正月を休む塩焼　　徳

名裏四。春（正月）。塩焼は、製塩。当時の方法は、入浜塩田法で、浜男、浜子（老人や女や子供）などが働いていた。塩田での労働は、きびしいものであったようで、一日四回の食事をし、二升食べたといわれる（日本民俗文化大系三技術と民俗（上一））。

年が改まって春になったが、まだ寒く雪が降っている。塩田でも今日は仕事を休んでいるが、折角の休みなのに、雪が降っている。春らしい感じもない正月だが、塩焼の仕事をする人々にとっては、体を休めるいい機会だろう。

芭蕉の、「昼顔に米つき涼むあはれ也」は、昼顔の咲く、暑い日中に涼む米つきをとらえて、あわれと見ているが、春らしからぬ雪の正月に休む塩焼もまたあわれか。

前句の、人のいない湊を、仕事を休んでいる状態と見て、正月の塩浜とした。

万葉によまれし花の名所哉　　谷

名裏五。春（花）。万葉は『万葉集』。『万葉集』には、巻七や巻十に、花を詠むとか花に寄せるなどとして分類された歌があり、それらの中に詠みこまれた地名は、三笠の山、高円山、阿保山、吉野の川、春日の野辺などがあるが、これらは、前句との関係が考えにくい。そこで、塩焼と花、桜に縁のある地名を考えると、須磨や塩竈が考えられる（類船集）。

須磨の場合は、『万葉集』に、

416須磨の海女の塩焼き衣の藤衣
　間遠にしあればいまだ着なれず

947須磨の海女の塩焼き衣の慣れなばか
　一日も君を忘れて思はむ

があり、この付句の名所は、須磨の浦のことを指すかとも思われるが、初裏の花の句に、須磨の浦が使われており、須磨の浦と特定するのは適当とは思われない。

従って、この万葉に詠まれた花の名所は、塩竈を含め、特にどこと定めないが、海浜の花の名所として、古い万葉の昔から伝えられてきたような所という、漠然とした場所を考えておくのがよいかと思われる。万葉・名所が俳言。

付けは、前句の、正月ながら風情のない雪の塩田の殺風景に対し、はるかのむかしに歌に詠まれた花の名所を付けた。

霞こめなと又岩城山　　雪

揚句。春（霞）。岩城山は、『万葉集』に、

315磐城山直越え来ませ磯崎の
　許奴美の浜に我れ立ち待たむ

があり、この岩城山は、東海道の由井と興津の間にある薩埵峠のことかといわれている（日本古典文学大系「万葉集」三）。

また、津志王丸が姉安寿を祭った岩城山権現のある、津軽の岩城山（和漢三才図会）もあるが、ここは、岩城の岩城山で、『陸奥衛』に、岩城平領内、湯本の近くにある岩城山をあげ、露沾や沾徳らと一座した歌仙の発句に、桃隣が

　遙に思ひやりし名所、風雅に
　ひかれて近く見侍り、一句を
　窺ふ

岩城山とおもへば香あり夏木立　　桃隣

と詠んでいる。その岩城山であろう。

岩城山の「いわ」に、「言う」の意がかけられていて、岩城山の姿が見たいので、霞でとじこめないでくれと、再び言おう、の意であろう。

「岩城山」は当然、露沾が、岩城内藤家の一員であることで、寄せたものであろう。ただし、露沾は、家老の讒にあって退隠していたのであるが、万葉の名所にかけて、郷国の山を出して、露沾を喜ばせ、めでたく一巻を巻きおさめたものであろう。